
女神の神話学再考

——とくに太陽女神／王権女神について

松村一男

——Abstract

Two themes are treated in this paper: The first is that we could perhaps obtain better insights by analyzing visual symbols more intensively in the myths and religions of areas and ages where and when there were no or scarce written records; The other consists of actual analyses of the myths and religions of goddesses of such areas and ages. I argue that there is a possibility that a type of Sun Goddess/Kingship-protecting Goddess existed in the Eastern Mediterranean area of the Neolithic and Bronze ages and in Japan during the Bronze/Iron age (i.e. From the Yayoi era to the Tumulus era).

——要旨

本稿では二つの課題を検討してみた。一つは文字資料が「ない」あるいは「少ない」地域や時代の神話と宗教を、図像を活用することでより知ることができるのではないかという考え方であり、第二に、そのための対象としてそうした地域や時代の女神について選択し、比較し、そしてある種のタイプとして確定する作業である。主な対象としたのは1. 新石器時代から青銅器時代の東地中海世界と2. 青銅器／鉄器時代（弥生時代から古墳時代）の日本である。そしてそれら地域では太陽女神／王権女神が共通して存在したのではないかと論じた。

はじめに

本稿では二つの課題を検討する。一つは文字資料が「ない」あるいは「少ない」地域や時代の神話と宗教を、図像を活用することでより知ることができるのではないかという考え方であり、第二に、そのための対象としてそうした地域や時代の女神について選択し、比較し、そしてある種のタイプとして確定する作業である。主な対象としたのは新石器時代から青銅器時代の東地中海世界と青銅器／鉄器時代（弥生時代から古墳時代）の日本である。そしてそれら地域では太陽女神／王権女神が存在したのではないかと論じる。

図像資料活用の可能性の検討の対象としてなぜ女神、しかも太陽女神を取り上げるのかは、以下で述べていく。ただ最初に「太陽」を対象とすることについて、些か弁明をして

おきたい。太陽が神話において重要なテーマの一つであることは否定できない (Fauth 1995; 松村・渡辺編 2002; 松村・渡辺編 2003)。研究対象としての重要性についての論考も書いている (松村 2009a; 2009b)。しかし、神話や宗教史に多少関心があれば、「太陽」というテーマには悪いイメージが最初からついていることも知っているはずだ。マックス・ミュラーはすべての神話を太陽の動きから説明しようとする自然神話学を唱え、レオ・フロベニウスも人類進化の過程の一段階として「太陽神の時代」を想定した。さらにエリオット・スミスと W.J.ペリーは太陽を崇拝する古代エジプト人が世界中を訪れ、巨石建造物やミイラ制作を伝えたと言った。私自身、この点についてはこれまで学説史の問題として何度も取り上げてきている (松村 1995; 2002; 2019a; 2021a; Matsumura 2019. また、ミュラー 2014 も参照)。だから—もちろん、本人としてはそれらとは別物と思っているが—これから論じようとする太陽女神／王権女神の考え方が、ミュラー、フロベニウス、スミス、ペリーの垂流だと最初から決めつけられることを懼れている。

『女神の神話学』後、四半世紀

今から四半世紀近く前に女神についての論文を集めて『女神の神話学』という題名で出版した (松村 1999)。男性の私が女神について書くことについては葛藤もあったが、女神についての研究会に出席して、多数派の女性陣に混じって他の何人かの男性とともに論集にも執筆していたので (田中編 1998)、一人きりではないという気持ちが女神についての論考をいくつか書いて、それを単行本にするのを後押ししてくれた。

出版後にあまり大きな反響はなかったが、それでも参照や引用されることもあったし、その後も女神についての関心は持ち続け、他の女性研究者とともに『アジア女神大全』(青土社、2011) とか『世界女神大事典』(原書房、2015) も編纂執筆した。

この度、『女神の神話学』が『女神誕生』と題名を変更し、また序論も入れ替えて、再刊された (松村 2022)。序論には『世界女神大事典』の総論を流用したが、体裁を整える必要があり、また文庫版あとがきも書く必要があったので、これをよい機会と思い、女神の神話学について再考してみようと思い、本稿をなした。

今にして思えば、「女神の神話学」という書名は、限られた地域と時代の女神について述べた著作には大風呂敷であった。しかし「処女母神の神話学」として男性支配者集団が女神を作り上げる例が複数あり、その思考の産物として作られた非現実的な「処女母神」についてはある程度説得的な解明ができたと思っている。

同書以降の女神についての考えの進展を述べる前に、同書での考えを再確認しておきたいのだが、そのためにも個別の章の内容についてすこし詳しくまとめておきたい。

第一章では旧石器時代の洞窟の大母神を取り上げた。文字がなく、壁画や小像から解釈するしかないテーマである。まず対象物は女性ではなくて女神であろうと推測した。さらに多産が願われたと推測した。そして後の歴史時代においては、この旧石器時代の女神の

系譜を継承する豊穡女神がいるが、それ以外のタイプの女神もいることを考え、科学的・実証的なデータはないが（それを示すことは誰にも不可能だろう）、未分化な旧石器時代の
大母神から歴史時代の職能別女神群へと変化したのであろうと論じた。社会が大規模化すると職能が分化し階層化するのと同様に、世界観も分化、階層化すると考えるべきであろうという立場から、女神の歴史的分化の可能性を提唱したのである。

第二章以下では文字記録を男性支配層が独占してきたことをまず確認した。そして現在まで残っている歴史時代の神話からは、そうした男性支配層の意図が読み取れると考えた。ただし、それが意識的か無意識的かを個別に区別することは困難であろうと思い（区別を可能にする方法が思いつかなかった）、その点には触れなかった。

このことは、女神の神話もまた歴史時代の神話テキストのコスモゴニー、コスモロジーの一部として男性支配層の意向に沿って作られ、伝えられてきたと想定することになる。女神についての神話が女性のためのものではなかったとまでは断言できないが、女神もその一部をなす神話体系においては女神の神話もまた、王権神話、英雄神話などの他のタイプの神話と同様に、男性支配層の世界観に沿ったものとして読み解くことが要請されると論じた。もちろん、すべての女神の神話をその観点だけから論ずるべきとは主張しない。しかし、男性支配層の神話としての女神の神話が存在するはずだ、と主張したのである。

第二から第四章ではこの男性支配層による女神神話の例として、日本、ギリシア、キリスト教に共通して見られる「処女母神の神話学」を紹介し、分析した。

第五章では男性が女性の親族、とくに姉妹、によって霊的に守護されるという、いわゆる「妹の力」の観念が日本の歴史の中でどのくらいの広がりをもつのかを検討し、次いで同様の観念が海外でも見られるかの検討を行った。男性は異性でありながら自己と血つまりは遺伝子を共有し、いわば自己の半身である姉妹に対して何を求めるのだろうか？もちろん、それは観念の問題である以上、答えは一つだけではないだろうが、この章での検討では日本ならびにその周辺文化の一部では姉妹に霊的守護を期待する観念が強いことが確認できたと思っている。世俗的活動に携わる男性にとって、霊的な守護を期待するのは、一つは父母であろうが、もう一つは男性にとって他者（異性）にして自己の半身というべき姉妹なのだろう。しかし、それをどれだけ意識化し、観念化するかは地域や時代によって異なるのではないだろうか。

第六章以下は古代ギリシアの女神としてアテナとアルテミスを、また男性の文化装置としてのギリシア悲劇とギリシア喜劇における女性の描かれ方を取り上げ、それらに見られる男性支配層の意識を考察した。悲劇、喜劇のいずれにおいても、舞台上で俳優たちが演じる女性役は非現実的な、ある意味神話的な存在であった。男たちに見せるために俳優が演じた女性役を男性によって作られる「女神の神話」の一部として考察することは正当だし、必要だと思う。

まとめると、歴史上の文字社会の女神神話を分析するには、文字記録が男性支配者層の産物である点が史料的な制約となる。その制約の中で意味ある考察をするには男性支配層

の意向の産物として読み解ける神話を中心とすることにならざるを得なくなった。そしてその制約の範囲内では、一定の成果をあげることができたと思っている。

男たちが作る神話学というか、学問一般の理論

男性研究者には自分たちが境界を作って、女性の研究者を排除しているという意識がどうも欠如しているようだ。普遍的な「人間」が学問をしていると思っている節がある。主観性・バイアスを認識していないのだ。この問題は、もう一步踏み込むならば、神話そして神話学自体が男の作った産物だという認識に至るべきということだろう。

男が神話学を作ってきたことのバイアスが一番顕著であるのは男女の関係性の認識の問題だろう。男は自分たちの理想像については熱心に語る。それは英雄であり、戦士であり、王者である。他方、女性、女神についてはそれほど熱心ではない。この点については私自身にも覚えがある。私が博士論文で書こうとした主題はインド＝ヨーロッパ語族の戦士集団の神話であった。それ以前には動物の象徴性とくに狼の問題に関心があったが、それも戦士イメージとの強い関連を思うなら、納得がいく。しかるに女性や女神についてはほとんど考えもしなかった。そういうテーマを設定すること自体が何か女々しい感じがしたのかも知れない。まさしく男というアイデンティティーにこだわって神話学をしていたのだろう。そして遅まきながらそれに気づいて、女神の神話へと方向転換したのである。

考えてみれば英雄というのは現実に近くにいたら困るような輩が多い。息子と戦って殺してしまう父親（「イーフェの一人息子の死」におけるクーフランとコンラ、『王書』におけるロスタムとソフラブ）や、狂気かられて子供や友人を殺すヘラクレス、怒りに駆られて味方がもっと死んでしまえばいいと祈るアキレウス、自分の命令のせいで妻と息子と息子の婚約者を自殺に追いやってしまうクレオンなど。どれもみな「間抜け男」である。しかし彼らは悲劇の主人公となっている。間抜け男はその間抜けさが壮大なスケールであれば、男たちの賛美の対象となるのだ。女性は多分そうした幻想を必要としないだろう。「アホやね、あの男」でおしまいである。

考古学でも男が（多分それと気づかずになのだろうが）自分の好みの男性的活動の方ばかりを熱心に研究するという傾向が指摘されている。男性の考古学者は（無意識に）派手で男性的な狩猟については熱心に道具を蒐集し、記述するが、女性が使っていた道具や女性の生産活動についてはあまり関心がない。それは正しい社会像の復元を妨げてきたと思われる。旧石器時代においては狩猟が食糧獲得の中心のように思いこまされてきたが、現代の狩猟採集民についての人類学的調査は、採集される食糧（食用植物のほか、卵や貝などの固着生物を含む）が八割を占めることもある。狩猟による肉はその残りである。当の男性狩猟民が自分の貢献を誇りに思い、過大に誇張し、他方女性の貢献を軽視するのは分かりやすいが、しかし男性考古学者までもその傾向をもつ必要はないだろう。たしかに石器時代の遺跡では動物の骨は残り、植物は残らないから（ただし最近は種子や花粉の分析で植物

についても分かるようになってきている)、採集より狩猟の情報ばかりになりやすいのだが、しかしそれを考慮に入れて過去を復元しなければ、学者ではないだろう。女性学者たちによる見直しが進められている (エーレンバーグ 1997 ; バーバー 1996 ; Wright ed. 1996)。

『女神の神話学』以降

以下は『女神の神話学』以降に考えてきたこと、つまり、文字記録のない社会について女神神話の研究は可能なのだろうか、という問題についての考察である。立場としては、限界はあるけれども一定程度までの研究は可能だというものである。文字記録がなくても図像や造形物や遺構が残っていて考古学的発掘によって発見されるので、それを手掛かりに考えられるからである。こうした文字記録のない場合について物理的資料を用いて分析をしようとする手法は、「マテリアルカルチャー研究」と呼ばれて、特に宗教の場合には「物質的宗教研究」と呼ばれているようだ (中村 2016)。また歴史学においては「文化的記憶」という視点から同様の研究が進められている。実際、こうした観点からの研究が近年、宗教学においても (津曲・細田編 2019; 津曲・細田編 2020)、歴史学においても (周藤編 2022) 刊行されている。

では文字資料が使えない先史社会ならびに歴史社会の女神神話を文字以外の資料を用いて考えることはどのようにしたら可能だろうか。これまで行なわれてきたいくつかの地域の研究例で上述の最近の研究では紹介されていないものを見ておきたい。もちろん、それらには問題、議論、批判が少なくない場合もあるが、それらも含めての紹介である。

女神の場合以外で、図像による研究がこれまでも行われてきている例のひとつがミトラス教である (Beck 1998 ; キュモン 1993 ; 小川 1993 ; Ulansey 1989 ; フェルマースレン 1973)。ミトラス教は、ローマ帝国における神殿跡の広がりや数の多さから、かなりの規模であったことが推定できる。しかし密儀宗教であったためか、文字記録は存在しない。そこで教義については神殿に残る像や図像が手掛かりとなる。ミトラス神は牡牛に馬乗りになってその首にナイフを突き立てている。牡牛の足元には獅子、蛇、流れ出る血を舐める犬、牡牛の睾丸を鋏で掴む蠍がいる。上からは鳥が見ている。牡牛の尻尾は麦の穂になっている。さらに脇には松明を持つ二人の人物が立っている。これらが星座を示していることは明らかだろう (牡牛座、獅子座、水蛇座、おおいぬ座、蠍座、双子座)。またミトラスと太陽神と一緒に聖餐の席に連なっている浮彫もある。ミトラス教の教義は天体と深くつながるものであったと思われる。またミトラスはプリュギア帽を被っている。これはこの宗教の発祥地を暗示しているだろう。

もう一つの例は、中央アジアの狩猟民と遊牧家畜飼育民の場合である。伝統的に彼らは文字を用いず、彼ら自身による文字記録はない。しかし、岩に絵を描き、また平原には石人や鹿石を多数立てている。これらは旧石器時代以来の洞窟の動物壁画にもその後の岩絵にも似通うし、南東ヨーロッパの古ヨーロッパ文化 (後述) の図像とも類似を示している。

人類学的調査からシャマニズムとの関連性も指摘されている。古代のスキタイ文化と関連する可能性もある（林 1996；林 2017: 24-42）。ここに女神の存在を想定する意見もある（Jacobson 1993；Jacobson-Tepfer 2015）。この問題については今後考えてみたい。

女神の場合の図像を用いた解釈については以下に四つの例を紹介する。

最初の例は、旧石器時代の「ヴィーナス像」である。極端な肥満体型は豊穡を与える女神の姿ではなく、厳しい氷河期を生き延びた女性の姿であるとする解釈も近年提示されている（Dixon and Dixon 2011）。また男性目線での解釈ばかりという批判もある（Nowell and Chang 2014）。もちろん、女神と考えるべきとする論考が依然として多数派のようである（Absolon 1949；McDermott 1996；Soffer, Adovasio, and Hyland 2000；Talalay 2012）。

第二の例は地中海のマルタ島で発見される新石器時代（紀元前 3600—前 2500）の巨石建造物である神殿に祀られていた肥満体型の女神像である（Lagana 2020；Malone and Stoddart 2017；Meegan 2014；Rountree 2003）。こちらについても女神と見なすべき、いやそうではない、という二派が対立したままである。神殿もあってそこに祀られているのだから（Trump 2002）、女神崇拜以外ではないだろうと思うのだが、専門家としてはやすやすと認めては沽券にかかわるのだろうか。マルタの場合を女神と認めてしまうと、旧石器時代のヴィーナス像や次に述べる古ヨーロッパの女性小像も女神としなければならなくなり、歯止めがきかなくなるので、認めたくないのかも知れない。

第三の例は新石器時代の南東ヨーロッパである。先史考古学者マリヤ・ギンブタス（1921-1997）は、インド＝ヨーロッパ語族進入以前の前七千年紀から五千年紀に南東ヨーロッパ（エーゲ海・中央バルカン、アドリア海地方、ドナウ河中流域、東バルカン、モルダヴィア＝西ウクライナ）に栄えた新石器文化を「古ヨーロッパ」と呼んで、その文化的均一性を指摘した。この文化に見られる土偶はほとんど女性像であり、鳥や獣と融合している場合もある。そしてこの文化は好戦的・男性中心的インド＝ヨーロッパ語族とは異なり、女神中心で平和的・農耕的であった。ギンブタスは、旧石器時代の女神崇拜の流れが、新しい経済形態およびそれに伴う新しい政治・社会形態を備えるにいたった新石器時代においても、意義づけこそ変われ、基本的には「豊穡の大母神」信仰として変わることなく継続していたと主張した。そしてその流れが、南東ヨーロッパ新石器時代の「古ヨーロッパ」文化においては、男神優位のインド＝ヨーロッパ語族のユーラシアのステップからの到来によって否定されたと主張した（ギンブタス 1989；アイスラー 1991）。

この説は長年、実証性を欠く、イデオロギ的・観念的産物として批判されてきたが、皮肉なことに最新の科学であるゲノム学がその正しさを証明した。南東ヨーロッパおよび北ヨーロッパにおいて女性固有のミトコンドリア DNA には大きな変化は見られず、従って新しい女性の流入は認められないのに対して、男性固有の Y 染色体は紀元前五千年紀を境に大きな変化が起こっている。一部の男性の Y 染色体が異常に増大しているのである。これは従来とは異なる男性集団が到来（侵略）してきて、そして彼らが現地女性と新しい共同体を作った結果と考えられる。これはギンブタスが「クルガン文化」（クルガン

kurgan はロシア語で「墳墓」を意味する）と呼び、現代では「ヤムナヤ文化」(Yamnaya culture) と呼ばれている、言語学的にはインド＝ヨーロッパ語族に分類される諸集団の侵入があったことの証左と解釈されている (Reich 2018: 105-110 ; ライク 2018: 166-172 ; 338-339. また Lazaridis, Alpaslan-Roodenberg et al. 2022 も参照)。

ただし、モンゴルやフン族のように大規模な戦士集団が殺戮を行って征服していったと想定する必要は必ずしもないかも知れないとライクは述べている。新世界にやってきたスペイン人の持ち込んだ病原菌によって抗体を持たなかった先住民が多く亡くなったのと同様に、ヨーロッパの農耕民は東からやって来た侵入者が持ち込んだ風土病に対して抗体を持たなかったため多く亡くなった可能性もあるというのである (Reich 113 ; ライク ; 176)。

ギンブタスは、旧石器時代、新石器時代からの豊穡の大女神の系譜は、インド＝ヨーロッパ語族時代のヨーロッパになっても完全には消滅せず、クレタのミノア文化において蛇女神、蜂女神の姿をとり、またギリシア本土においても穀物女神でエレウシスの密儀の主神であるデメテル、その分身としてのコレ (ペルセポネ) の姿で残っているし、またヘカテや「獣の女主人」アルテミスにも大地母神の面影が残っていると考えている。もちろん、大地母神の諸側面が個別化した形状で表現されているとして、①水の女王としての「鳥女神」と「蛇女神」、②生と死と再生の女神、③多産女神と植物女神という区分も提示している (Gimbutas 1989 ; Gimbutas 1999)。

こうしたギンブタス説には賛否両論がある。反対する意見としては、そんな女性中心の平和主義の社会が広い地域に長期にわたって存続しえたのか、そのような社会の存在は歴史上、他に知られていないし、その存在の証拠がトリヤヘビと一部融合したような姿で作られた女性小像だというのは、あまりに説得性に欠けるといえるものである (Tringam and Conkey 1998)。他方、城壁のない集落、女性の埋葬品の豪華さも男性のものに劣らないこと、そして女性小像が神殿で供犠を受けているような、普通の女性像とは思えない特別な状態で出土することなどから、ギンブタス説を支持する意見も根強い (Dexter 1990 ; Marler ed. 1997)。

たしかにギンブタス説は女神崇拜の新宗教 (Neopaganism) に利用されているが、その点を割り引いたとしても、反対者・批判者たちが批判はしても、建設的で説得的な新しい代案を出せずにいるのには手詰まり感がある。後の時代でこれほど多くの女性像あるいは女神像が作られた例は、十二世紀の西洋キリスト教世界における聖母マリアと現代まで続くヒンドゥー教世界の各種の女神たち (デーヴィー) くらいではないだろうか。そしてそれらはもちろん女神崇拜に他ならない。ただし、女神崇拜が盛んだからといって、その社会での女性の地位が高かったと主張するつもりはない。理念的な女神像と現実社会での女性の地位とは連動していないことは、古代ギリシアがその典型なので十分に承知している。女神の図像の解釈という理念の問題に現実の女性の問題を持ち込んで批判しているのはどちらなのか、とむしろ尋ねたいくらいだ。

第四の例はクレタ島のミノア文化 (エーゲ海文化、クレタ文化とも) である (加藤 1988 ;

周藤 1997 第二章－第四章；手嶋 2000 第一章「クレタの春」；土居 2022 等参照）。英国の古典学者アーサー・J・エヴァンス（1851-1941）は 1900 年にクノッソスの発掘をはじめ、四半世紀以上にわたって発掘を継続した。彼はクノッソスの発掘現場を宮殿と考え、絵画や建築を復元したが（Evans 1901；Evans 1912；Momigliano et al.1999）、それについては賛否両論がある（Alexiou 1969；Bintliff 1984；Bonney 2011；Castleden 1999；Eller 2012；French 1971；Harlan 2011；Marinatos 2010）。

ミノア文化には三種類の文字があった。後期の線文字 B については、ギリシア語で書かれていることが判明した。しかしそれ以前に用いられていた聖刻文字（Cretan Hieroglyph）と線文字 A はいまだに未解読であり、言語系統についてもギリシア語以外であるという以外には分かっていない。このため、歴史、文化、神話のいずれについても解明が進んでいない（Duhoux and Davies 2008）。線文字 B 文書についても、女神の神話についての言及は何もない。神話自体が記録されておらず、あるのは在庫管理の記録ばかりである。したがって女神の神話の解明に図像に頼らざるを得ないという状況は、ミュケーネ文化においても変わらない。

ミノア文化の図像でいえば、女神の像は多いし、姿勢や位置や装飾も男神に勝っている（Alberti 2001；Cold stream 1984；Nilsson 1950；Peatfield 2012；Kakellarakis 1999）。またもう一つ、クレタのあちこちに散在するいくつかのクノッソスを代表格とする「宮殿」群にはいずれも後のミュケーネ時代のような城壁がなく、前述の東ヨーロッパの「古ヨーロッパ」文化に似た平和的な社会が想定される。だからこそギンブタスはクレタ文化と古ヨーロッパ文化の共通性を指摘している。したがって、ここでもギンブタスの唱える古ヨーロッパ文化像に対するのと同様の反論や批判がミノア文化の解釈に向けられることになる。

実はギンブタスに似たミノア文化解釈はすでにエヴァンス自身が唱えていた。これについてはエヴァンスの生きた時代や彼自身の個人的背景など学術的ではないさまざまな要素の影響が指摘されている（Eller 2012；Morris 2006）。それは面白い見方だし、事実かも知れないが、だからといって、ギンブタスの場合と同様にイデオロギー的であるからただちに否定すべきとは言えない。なぜなら繰り返すが、否定する側はよりよい代案を示せていないのである。

ミノア文化が後のギリシア文化とくに神話にどのくらいの影響を与えたのかについては諸説があるが、大きく見積もりたくなる気持ちはよく分かる。なぜなら、ギリシア神話におけるクレタ島の存在は大きいからである。たとえば主神ゼウスが母レイアから生まれたとされるのはクレタ島のアイガイオン山中の洞窟である（ヘシオドス『神統記』477行以下）。またゼウスがフェニキアの王女エウロパを見そめて、白い牡牛に変身して彼女を背に乗せたまま海を渡るとクレタ島に着く。そしてそこでミノスが生まれ、彼は島の王となる（アポロドロス『ギリシア神話』3.1.1.すでに『イリアス』14.321に言及がある）。そして『オデュッセイア』の中では、オデュッセウスが身分を隠すのにクレタ人に扮して、島の繁栄の様子を語る場面もある（19.172ff.）。クレタ島では当初のミノア文化がテラ（サント

リニ) 島の大噴火、ミュケーネ人の侵攻、「海の民」の侵攻などによって姿を消した。しかし、その文化的遺産はミュケーネ文化に引き継がれ、いわゆる暗黒時代を経て登場する古拙期、古典期のギリシア文化にも引き継がれたと目されている (Burkert 1985: 10-53. 「海の民」については Birney 2007 ; Sandars 1985 参照)。

クノッソスをはじめとする複数の「宮殿」には城壁はなく、建物の中の装飾は他のオリエント文化とは異なり、花、水鳥、動物 (ウシ、サル、ヘビ)、ハチ、海洋生物 (イルカ、タコ) など自然が多く、また人物像も若い男女など平和的である (Chapin 2004 ; Higgins 1981)。その後の城壁に囲まれたミュケーネ文化の諸国家とは異なっている。

クレタ島の支配者はエジプトの新王朝最初の第 18 王朝 (前 1570 頃—前 1293 頃) に従属していた時期があったようで、牡牛の頭部の角の間に太陽を配した図柄を描いたクレタ製の容器が王家の谷の墓から出土している (Marinatos 2010: 117-118)。大小さまざまな抽象化されたいわゆる「聖別の角」(bull's horns) はクノッソスの「宮殿」のあちこちに見られ、一般にクレタ文化のシンボルと受け取られている。しかしこれは同時に太陽がそこから出現する宇宙山 (cosmic mountain) でもあったらしい (Marinatos 2010: 103-113)。またクレタ文化では多くのさまざまな大きさの両頭の斧 (双斧) が出土しているが、図像の中には牡牛の角型の宇宙山の間にこの両頭の斧を描いているものが複数あり、両頭の斧は太陽の象徴でもあったと思われる (Marinatos 2010: 114-130)。このように最初期のミノア文化はエジプトとの交流の中で形成されたらしい。以下に見るようにエジプトでは太陽女神／王権女神ハトホルとその息子であるホルスのペアが存在した可能性があり、エジプトから初期に多大の影響を受けたとされるミノア文明における女神と若い男神の図像についても、太陽女神／王権女神とその庇護を受ける子供としての王を表したものかも知れない (Goodison 1989 ; Marinatos 2009 ; Marinatos 2010)。

女神図像の比較研究の可能性——太陽女神／王権女神を例に

以上さまざまな文化における女神の図像解釈を紹介してきたが、そこにはつねに主観的解釈に陥る危険性がある。ではどのようにしたら客観的な図像解釈は可能だろうか？その方法の一つが周辺地域の図像解釈との比較によって、独断的解釈を避けるというものである。以下では太陽女神／王権女神という比較的まれなタイプの女神が各地に見られることを紹介し、その意味を考察してみる。

日本神話には太陽女神アマテラスがいる。彼女は皇祖神つまり王権の守護女神である。アマテラス以前には男性の太陽神・皇祖神としてタカミムスビがいたとする説もある (溝口 2009)。太陽神も王権の守護神も、男神でも女神でもありうるだろう。どちらを選ぶかはそれぞれの歴史社会での状況による。ただ、太陽女神にして王権女神というのは世界的に見て少数派である。アマテラスについてはすでに「処女母神」というタイプとして分類しようと述べた。そして今回、同時に太陽／王権女神というカテゴリーとして他に類似の

女神がいないかを考えようとするのである。以下ではこのカテゴリーに入ると思われる女神を紹介していく。

地中海の東端にはシリア（フェニキア、レヴァント、ウガリット）がある。その北にはヒッタイトがある。そして南にはエジプトがある。そして西の端に位置するのがクレタ島である。これら四地域では交易が行われていた。シリア、ヒッタイト、エジプトがクレタを認識していたことは、これら三地域の文字資料が証明している。つまり、クレタの文字資料の欠如は交流のあった他の三地域の資料によって補われる部分がある。さらにクレタ以外の三地域には文字資料だけではなく、図像資料も残っている。これらについてクレタの図像資料と比較すると共通する図像が多く認められる。つまり、地中海の四方にあった四地域は交流によってある程度均質な文化を形成していた可能性があるのだ。

エジプトでは女神ハトホルが大きな位置を占めていた。ハトホルという名は「ホルスの家」を意味し、ハトホルはエジプト王の神格化であるホルスそして王権女神であった。彼女は頭に牝牛の角を戴き、角の間には太陽が据えられていた。また彼女は別名セクメト（女性形の「力強き者」）と呼ばれ、男神の太陽神ラーの眼とされた。このようにハトホルは太陽女神であり王権女神であった。これがクレタ文化の王権女神としての太陽女神とその子としての若い男神王のモデルとなったと考えられる。後代、ハトホルの王権女神の地位はイシスに取って代わられたため、一般にはエジプト王の化身ホルスの母つまりは王権女神なのはイシスであると思われているが、本来はハトホルがそうであった（Hart 2005: 61-65）⁽¹⁾。

クレタ島のミノア文化がエジプトから強い文化的影響を受けており、大女神、彼女とペアを成す若い男神、聖別の角、宇宙山、太陽の象徴でもあった双斧などがエジプトの図像や神話との比較によって分析できることはすでに述べた。

シリアのケースとして最初に取り上げるのは、フェニキア、ウガリット以前の紀元前2000年から1600年頃の青銅器時代のシリア（エルバ、レヴァント）の出土品である。この時代のシリアとエジプトの間に交流や交易があったことは、出土品の中にエジプトの影響下にシリアにおいて作成された円筒印章があるから確認されている。その中にはハトホル（頭に牝牛の角と太陽）が王（オシリスのような冠を着けている）に祝福を与えて、周囲にはスピックスが配されている図柄などエジプト的なものが複数認められる（Marinatos 2010: 16; 64; 123; 156）。エジプトからの図像的な影響は明らかである。ではシリアに見られるのはエジプトの王権神話であって、シリアの青銅器文化のものではないのだろうか。ただちにそうとは決めがたい。なぜなら、紀元前14世紀から13世紀のウガリット神話「パールとヤム」には太陽女神としてシャパシュが見られるからである（Gibson 1978: 38）。シリアの円筒印章に現れる、エジプトのハトホルと同様の太陽女神／王権女神は、シャパシュの可能性もある。ただしウガリット神話における彼女の役割はあまり大きくない。「パールとヤム」においても活躍している女神はメソポタミア系のアナトである。また太陽神としてはシャパシュよりもメソポタミア系の男神シャマシュの方が目立っている。おそらく強

いメソポタミアの影響下に、エジプトでハトホルの地位がイシスによって取って代わられたのと同じように、太陽女神／王権女神シャパシュの影は薄くなったのだろう。シャパシュという名前自体、シャマシュから造形された可能性が高い (Matthiae 2014)。

メソポタミア、シリア、カナンにおいて最も有力な女神の系譜はイナンナ／イシュタル／アナト／アシュタルテ／アシェラ (アーシラト、アシェラト) という豊穡女神であり (Stucky 2003)、太陽女神／王権女神はこのタイプの女神に取って代わられた以前のより古いタイプであった可能性が高い。

ヒッタイトについては首都ハットゥーシャ (現ボアズカレ) 近郊ヤズルカヤにある屋外神殿に十二神の浮彫が残っている。これについては、インド＝ヨーロッパ語族系のパンテオンとする説がある (Masson 1989)。しかしヒッタイトにはこれとは異なる、より古いハッティ (Hatti) 系の神々もあり、両者が共存していた。

エジプトとヒッタイトの交流は、ハットゥーシャの遺跡のスピンクスやトルコの首都アンカラのアナトリア考古博物館の展示品を見れば、納得できるし、新王国時代第十八王朝の第三代の王ラムセス二世 (在位前 1279－前 1213 頃) はヒッタイトと平和条約を結び、ヒッタイトの王女たちを政略結婚であろうが妻にしている (大城 2019: 415)。

しかしここで問題にするのは、より古い、非インド＝ヨーロッパ語族系のハッティ系の神話の方である。ハッティ系の神々の中には首都ハットゥーシャ近郊の宗教都市アリンナの都市名を冠して、「アリンナの太陽女神」と呼ばれる女神がいた。彼女には国家の守護神とされる嵐の神との間に子として太陽の男神がいた (Beckman 2013: 89; Beckman 2018; Hoffner Jr. 1998: 24, 38; MacQueen 1959: 175-178; Torri 2019)。彼女はハトホル、シャパシュと同様に太陽女神／王権女神であったと思われる⁽²⁾。

交流のあった他の地中海域の文化の文字資料と図像資料と比較することで、ミノア文化、ミノア神話研究は大きく解明が進むと期待されている。ミノア文化においても女神像がある。よく見られるのは、女神が座り、その前に若い男神が立つという構図である。そばに太陽のシンボルが描かれることも多い。こうした構図は、シリア (含むキプロス島)、ヒッタイトなどでも認められる。これは若い男神が王を表しており、その母にして王権の授与者が太陽女神であると考えられる (Marinatos 2010: 151-158)。

四地域の共通性の背景

人間が他の地域と交流しようとする大きな理由は自らの住む地域では入手できないものを他地域から入手しようとする事だろう。金属加工の知識と技術を獲得すると、それによって武器や農耕具を作ろうとした。しかし銅だけでは柔らかすぎた。しかしそこに錫を加えると強度が増すことが分かった。こうして銅の原産地、錫の原産地でインゴット (鋳塊) にされたものが青銅製品の製造地に持ち込まれ、製品化されて各地に流通したのである。

今、問題としている東地中海域では、青銅器時代は紀元前 1200 年頃に終わり、鉄器時代となる。錫の産地の一つは今のアフガニスタンであり、もう一つは中央ヨーロッパ、ブリテン島、フランスのブルターニュ、ポルトガル、スペインであった。これらのいずれかあるいは両方から錫が交易で持ち込まれた。もちろん代価を支払う必要がある、その一つが陶器製の装飾ビーズであつたらしい。その発掘の分布図からはオリエントで作られたビーズが遠くブリテン島やアイルランドで発掘されていることが分かる (Woudhuizen 2017: 344-345, esp. Fig.1)。同じオリエント製はエジプト、クレタ、シリア (カナン) でも発掘されている (同)。こうした青銅製造の原材料の必要性は各地域の国家間での争いの種 (資源獲得戦争) となるが、それは同時に無駄な戦争を避けて互いの利益を増すという交易の増大にもなりうる。そして交易の増大とは人の交流の増大であり、文化的な交流の増大でもあつたはずだ。

歴史的関連性と類型的比較

これまで太陽神は男神が一般的で、太陽女神は日本のアマテラスやアリンナの太陽女神など、単発的で例外的であるという見方が主流であり、しかもアマテラス、アリンナの太陽女神については、なぜ太陽女神なのかについての説得的な理由も示されてこなかった。しかし地中海域の四地域での太陽女神の描かれ方とその背景にあると思われる思想を考えると、太陽的な王を生み、支配権を授けて保証する母神が太陽女神なのではないか？という見方に至る。

『女神誕生』(旧『女神の神話学』)においてはアマテラスについて、処女母神という現実には不可能であり、それゆえ超越的の神性を可能とする造形を男性支配層が考えついで神学化したものであろうと論じた。そして同じタイプとしてアテナ、聖母マリアがあると指摘した。しかし今回の検討によってアマテラスは同時に太陽女神／王権女神というタイプにも属していると考えに至った。神格が複数のタイプを兼ねることは珍しくない。アテナは処女母神の他に戦闘女神、機織り女神、知恵女神などにも分類しうる。

強調したいのは、太陽女神／王権女神アマテラスは孤立したタイプではないという点である。数は多くないが、エジプトのハトホル、シリアのシャパシュ、ヒッタイトの「アリンナの太陽女神」、そしてクレタ文化の太陽女神がこれに属すると思われる。アマテラス以外の女神たちは東地中海世界の交流の中で類似した属性になったのかも知れない。エジプトが起源かも知れないが、その点は重要ではない。むしろある種の政治体制が維持のために太陽女神を主神として、王をその配偶者／息子／愛人と位置づけ、女神が王権女神となるという形態の一致が生じて維持されたいという点が重要なのである。起源や伝播よりも、同じタイプが異なる歴史社会で維持される理由の方がより解明に値する問題だと考える。

もちろん、文化刺激＝伝播を考えるべきではないというのではない。ヒッタイトの「ア

リンナの太陽女神」は後のプリュギアの山の女神キュベレに影響を与えた可能性がある。そしてキュベレは東に伝わり、中国における西王母の形成の刺激になった可能性がある。西王母は山の女神の他、『穆天子伝』に見るように王権女神の側面を併せ持っている（森 2005）。西王母の姿を刻んだ三角縁神獸鏡は3世紀に邪馬台国の卑弥呼のもとに届き、各地の豪族のもとには連帯の印として鏡が頒布された。卑弥呼の存在はアマテラスの造形に影響を与えている（松村 2021b）。太陽女神／王権女神は女神の類型論と歴史的伝播の可能性の両方の検討例として興味深いものである。

インド＝ヨーロッパ語族の女神研究

次に比較対象のために、インド＝ヨーロッパ語族の女神研究についても述べておきたい。正直、研究はあまり盛んとはいえない。インド＝ヨーロッパ語族研究のマニュアル本や事典類で「女神」についての記述の少なさは驚きである（Mallory 1989；Sergent 1995；Mallory and Adams 2006 等参照）。理由は単純で、ひとつは男神に比して資料が乏しいためである。インド＝ヨーロッパの女神の名称の多くは、とくにギリシアの場合が顕著なのだが、インド＝ヨーロッパ語としては解釈できない。つまり非インド＝ヨーロッパ語に由来する、あるいは前インド＝ヨーロッパ期にさかのぼるとされる。この点を説明しようとするれば、戦闘要員としての男性が中心になって他民族の領域に侵入して、土地の女性を娶って、その支配層になっていくという構図の結果ということになるだろう。女神については非インド＝ヨーロッパ語族系の住民のものを採用したので、名称も非インド＝ヨーロッパ語であるという説明である。これは上述のギンブタスが平和的・農耕的な古ヨーロッパ社会に戦車を駆るインド＝ヨーロッパ語族系の男性戦士が侵入して、その後はインド＝ヨーロッパ語族系の言語が用いられる社会になったという図式そのものである。ギンブタスの古ヨーロッパ社会の復元図を非実証的、理念的、理想主義的、イデオロギー的などと批判することは容易だろうが、女神の名称ならばギンブタスの図式での説明が説得的なのである。イギリスの考古学者コリン・レンフルーはギンブタスを批判して、代わりとなる古ヨーロッパおよびインド＝ヨーロッパ語族についての見取り図を提示したが、失敗している（レンフルー 1993；アンソニー 2018）。

しかし研究の不振には他の原因もあるだろう。インド＝ヨーロッパ語族研究者の多くが男性であり、そもそも女神に関心がなかったと思われるからだ。男性のインド＝ヨーロッパ語族研究者は、女神を生み出すか維持するかの存在としてしか見てこなかったのかも知れない。神話を作る社会層にとって女神が与えるのにふさわしいのは、王権であり、勝利であり、豊かさの産物（豊作、快楽、美などか）である。女神が王権を与えるというタイプの神話はアイルランドに特に顕著に見られる（後述）。

共住期に遡る女神を決める基準を語源の一致とするなら、それは自然現象の擬人化と区別しがたくなる。つまり明確な人格神として人々の崇拜を集めたというよりも、自然の擬

人化の部分が強く、神話に描かれても実際の崇拝の対象としての意味には疑問符がつきそうなのである。もちろん前述のように、女性が崇拝していた可能性は否定できないが、資料は不足している。この結果、三機能体系との関わりにおいてしか女神の共通性は記述できない。それ以外の女神には自然現象の神格化が多い。以下ではその例を示す。インド＝ヨーロッパ語族にも太陽女神はいるが、その役割はこれまで見てきた例ほど大きくない。

・曙女神：インドのウシャス、ギリシアのイオス、ローマのアウロラが典型である (Dexter 1990: 36-39)。ギリシア神話のヘレネにその痕跡を認める説もある (Edmunds 2016)。

・太陽乙女：インドのスーリヤーは太陽神スーリヤ (またはサヴィトリ) の娘。アシュヴィン双神の花嫁とも、月神ソーマの花嫁ともされる。バルト語派 (ラトヴィア) にはサウレス・メイタ Saules Meita がいる。彼女は太陽女神の娘である。彼女は天空神の双子の息子ディエヴァ・デーリ Dieva deli と結婚する。異伝では、彼女が結婚する相手は月神メネスであり、双子は婚姻に列席する (Dexter 1990: 39-41)。

・大地母神：インドのプリティヴィとギリシアのガイアは叙事詩レヴェルでは共通性を示すが、それ以外には共通性は見られない (Dexter 1990: 41-42; 松村 2021a: 206-207)。

・河女神：河川の女神の名前の共通性はある (サンスクリット語ダヌス、アイルランド語ダヌ、ウェールズ語ドーン)。また現実の河川の名前もダニューブ (ドナウ)、ドン、ドニエプル、ドニエステルなど、同じ系統である。しかし神話自体は見当たらない (Dexter 1990: 42-46)。

・三機能包括女神：前インド＝ヨーロッパの女神たちは、ギンブタスの考察にしたがえば、大母神的である。こうした女神は三機能体系によっては分析できず、つまりは三機能包括的 (trifunctional) という形で位置づけるしかない。ギリシアの場合には、Athena Hygieia, Pallas, Nike、ローマの場合は Juno Seispes, Mater, Regina、アイルランドでは Medb と三人のマハ Macha、そしてイランでは Aredvi Sura Anahita がこのタイプに属する (Dexter 1990: 146-157)。

・王権女神：アイルランドの叙事詩『クーリーの牛取り』ではコナフトの女王メイヴの存在が大きい。彼女は男性の王に対してその地位を与える存在、つまり王権女神的存在である。これは他のインド＝ヨーロッパ語族の神話や叙事詩には見られないタイプであり、インド＝ヨーロッパ語族以前の古ヨーロッパの文化層に由来するかも知れない。その場合、前述の太陽女神／王権女神との関連の可能性も考えられるだろう (Dexter 1990: 88-93)。

女たちが作る女神

女たちは女神の神話を作ってきたことはないのだろうか。私はあったと思う。女たちは確かに神と神話を作ってきたはずである。ただそれは女性のみ限定された祭の神であり、神話であったと考える。例に挙げるのは古代ギリシアのテスモボリア祭である。この祭は10月から11月 (太陰暦の Pyanepsion の月の11から13日) に行われた。この月は種まきの

季節である。祭神は女神デメテルとその娘コレ（ペルセポネ）で、子供を産んだことのある市民の妻の女性のみが参加でき、処女は参加できなかった。夜に行われた。これは女性にとって夜自由に家を離れて徘徊できる例外的な機会であった。6月頃の祭スキラで豚の供犠が穴に投げ込まれるが、腐ったそれを再び取り出して豊饒のために用いたらしい。他に蛇や男根象徴も用いられた。また意図的に猥褻な会話が交わされた。死と再生の儀礼で女性の加入儀礼でもあったらしい。処女の参加が認められていなかったことから、子供のいる主婦がより高いステージに進むための儀礼であったかと思われる。アリストパネス『女だけの祭』とはこの祭のことであり、ホメロス風讃歌のうちの「デメテルへの讃歌」はこの祭の背景をなす神話であったと思われる（Burkert 1985: 242-246；Foley 1994；Richardson 1974）。

ただし、女性だけの祭、女性だけの儀礼（そしておそらくそれに付随する神話も）があったとしても、だからといって女性の自立が保持されていたという肯定的な評価だけではすまないだろう。それは女性の活動領域が限定されていた、神話・宗教に関してある種の「保留地」から出ることを許されていなかったことの裏面でもあるからである。

性器露出図像の神話？

今回取り上げなかった女神についての問題の一つは、性器露出の図像である。古代ギリシアの場合には図像と伝承の両方があるので、まずこれを紹介したい。エレウシスの密儀の神話として、穀物女神デメテルがハデスに誘拐された娘コレ（ペルセポネ）を探して地上を彷徨い、エレウシスの地に至った時に、パウボという女性が女神に食事を勧めたが彼女が摂ろうとしないので、侮辱されたと感じて性器を露出したところ、女神は笑い、食事を摂ったという伝承が知られている。ただしエレウシスの密儀の公式の神話は「デメテルへの（ホメロス風）讃歌」が伝えているものであろう。こちらにはパウボは登場せず、性器露出もない。イアンベという女召使が「ふざけた言葉をあびせると」デメテルは微笑み、その後、食事を摂ったとなっている（198-211行）。パウボの方は紀元後195年作とされるアレクサンドリアのクレメンスの『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）（のみ）が伝えている。その中でクレメンスはこれが「オルフェウスの詩句」に由来すると述べている（秋山訳2010: 20.2）-21:1）。クレメンスの伝えるギリシア神話は他にも異端的なものが多い。したがってこの伝承をギリシア神話・宗教の体系の中でどれだけ、どのように評価するかは難しい問題である。つまり、エレウシスの密儀自体と性器露出伝承と結びつきの強さを推測するのは困難なのである（Foley 1994: 228-230；Richardson 1974: 81-82；215-217）。

とはいえ、性器を露出している女性の図像が古代ギリシアに少なくないことは事実である（Lubell 1994）。そして、性器を露出（expose）する女性像は古代ギリシアに限らず、世界中の多くの時代、地域に見られる（Dexter and Mair 2010；Dexter and Mair 2013）。これらは女神なのか、神話や儀礼を有するのかを判定する自分なりに納得できる基準が見つけれ

い限り、女神のカテゴリー分類の中に含めることはまだできないだろう。しかし残念ながら、この頻出する性器露出の女性像が女神なのかを判断する基準を私はまだ見出していない。したがってこのタイプについてはここでは紹介に留め、将来の課題としたい。

まとめ

文字資料は男性支配層が自分たちの権力を誇示し継続させる目的で作らせたものと考えべきであり、神話、そして女神の神話も文字資料による限りは男性支配層の産物として考えるべきである。もちろん、例外はあるがそれは少数と思われる。

文字資料のない社会の場合には図像資料に頼ることになる。もちろん、文字資料の偏りを防ぐために図像資料との併用、比較検討が望ましいが、図像資料についても男性支配層の産物である可能性は高いだろう。

図像資料の解釈は文字資料の解読、分析、解釈よりもさらに主観的にならざるをえない。客観性を高めるためには、交流があった文化や類似の社会様式をもつ文化における図像資料との意味のある比較を行うことが望ましい。なんでも比較すればよいのではない。適切な比較でなければ、かえって妨げとなる。

図像資料の分析による研究の例としてはまずミトラス教と中央アジアの狩猟民と遊牧家畜飼育民を紹介し、女神研究の例としては、前半では旧石器時代、マルタ島、古ヨーロッパ、ミノア文化を紹介した。その多くにおいて、客観的な解釈の基準がないために研究者の主観による部分が大きく、解釈が分かれて対立している状態が見られた。

次にエジプト、シリア、ヒッタイト（ハッティ）、クレタ島そして日本という、比較的歴史的な関係が強いことが確認できるいくつかの社会を中心に、図像の比較を試みた。その中では日本だけがつながりがない。しかし、つながりがない場合でも類似の女神神話、女神像が作られる可能性があるのではと考え、あえて比較の一つとして入れてみた。また本来の方法論的なテーマである図像の比較はもちろんだが、それを補う比較の資料として文字記録についても配慮した。そして比較考察の結果として、太陽女神／王権女神というタイプの女神が複数の地域で歴史的なつながりの産物として生じる可能性、そして歴史的なつながりがなくとも社会の要請に基づいた結果として独立に生じる可能性もあることが、示せたと思う。

本稿では「処女母神」というタイプと並ぶタイプとして、「太陽／王権女神」の存在を指摘してみた。「処女母神」については、生み出される必然性についてある程度説得的な説明ができたと思っているが、「太陽／王権女神」もまた、男性支配層の観念的産物と見なすべきなのか、という点についてはまだ考えがまとまっていない。仮にこのタイプの女神の存在が認められたとしても、その存在が要請される背景については、さらなる考察が必要と感じている⁽³⁾。

—注

- (1) ただしエジプトの女神の専門家である古代オリエント博物館の田澤恵子氏からはハトホルを太陽女神／王権女神と解釈することにはメール（2022/08/19）で疑義と批判を受け、その典拠となる論文も贈られた（Tazawa 2022）。記して感謝申し上げる。エジプトの女神の問題は大変に複雑で、私が書いたような単純なものではないらしい。ただしエジプトの神々や王権についての知識がクレタ、ヒッタイト、ウガリットの諸文化に伝わったことは確かなので、たとえエジプトで太陽女神／王権女神としてのハトホルが明確に成立しなかったとしても、他地域においてはエジプトからの刺激のもとに太陽女神／王権女神というタイプが成立したという可能性は残るだろう。
- (2) ヒッタイトの太陽神については吉田大輔氏の論考が詳しい。ただし、ここでは太陽女神／王権女神という見方は示されていない。ここで提示している複数の地域に共通する独自のタイプの女神像というのは、個別の神話・宗教の専門家からは考えにくいのかも知れないし、実証性を欠いていて、取り上げる気にならないのだろう（吉田 2003）。またこの女神をギリシアのアテナと比較した論考もある（Teffeteler 2001）。ヒッタイトとギリシアが今回取り上げている青銅器時代の後期に比較的緊密な交流があり、神話的モチーフも共通のものが少なくないことは事実なので（松村 2019b：35-38）、今回のような青銅器時代の東地中海域の太陽女神／王権女神というカテゴリーとは別の共通性の比較も可能かも知れない。そうすると処女女神としてのアマテラスとアテナという共通性の比較とは別に、新たにアマテラス、アテナ、アリンナの太陽女神の三者の比較をすることになろう。今後の課題としたい。
- (3) 西洋古典学の西村賀子先生には草稿をお読みいただき、数多くの貴重なご指導を賜った。篤く御礼申し上げます。

—参考文献

- 秋山学（訳）「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）—全訳—」
筑波大学大学院人文社会科学研究所人文・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57（2010）, 1-82
リーアン・アイスラー（野島秀勝訳）『聖杯と剣: われらの歴史、われらの未来』、1991（Eisler, Riane. *The Chalice and the Blade: Our History, Our Future*. Harper & Row, 1988）
デイヴィッド・W・アンソニー（東郷えりか訳）『馬・車輪・言語』上下、筑摩書房、2018（David W. Anthony. *The Horse, the Wheel, and Language: How Bronze-Age Riders from the Eurasian Steppes shaped the Modern World*, Princeton University Press, 2007）
マーガレット・エーレンバーグ（河合信和訳）『先史時代の女性—ジェンダー考古学事始め』河出書房新社、1997（Ehrenberg, Margaret. *Women in Prehistory*. University of Oklahoma Press, 1989）
大城道則「古代エジプト」、吉田敦彦編『世界の神話 英雄事典』河出書房新社、2019、第十七章、395-420
小川英雄『ミトラス教研究』リトン、1993
加藤静雄『エーゲ文明の「道」』三修社、1988
フランツ・キュモン（小川英雄訳）『ミトラの密儀』平凡社、1993
マリヤ・ギンブタス（鶴岡真弓訳）『古ヨーロッパの神々』言叢社、1989（Gimbutas, Marija. *The Goddesses and Gods of Old Europe: 6500-3500 B.C.: Myths and Cult Images*. Thames and Hudson, 1982）
周藤芳幸『ギリシアの考古学』同成社、1997
周藤芳幸編『古代地中海世界と文化記憶』山川出版社、2022
田中雅一編『女神 聖と性的人类学』平凡社、1998
津曲真一・細田あや子編『媒介物の宗教史【上巻】』リトン、2019
津曲真一・細田あや子編『媒介物の宗教史【下巻】』リトン、2020
手嶋兼輔『海の文明ギリシア—「知」の交差点としてのエーゲ海』講談社、2000
土居通正「宮殿消失前の城壁拡張が示唆する、近づく戦争の脅威—エーゲ文明（ミケーネ「帝国」）の崩壊」、鈴木董編『帝国の崩壊（上）』山川出版、2022 所収
中村祐希「宗教学におけるマテリアルカルチャー研究」『東京大学宗教学年報』34（2016）245-255.
エリザベス・W・バーバー（中島健訳）『女の仕事—織物から見た古代の生活文化』青土社、1996（Elizabeth

- Wayland Barber. 1994. *Women's Work The First 20,000 Years: Women, Cloth, and Society in Early Times*, Norton)
- 林俊雄「モンゴリアの石人」『国立民族学博物館研究報告』21 (1996) 177-283.
- 林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社学術文庫、2017
- M. J. フェルマースレン、(小川英雄訳)『ミトラス教』山本書店、1973
- 松村一男「インド＝ヨーロッパ比較神話学の生成—マックス・ミュラーとその時代」、松原孝俊＋松村一男編『比較神話学の展望』青土社、1995、272-290
- 松村一男『女神の神話学』平凡社、1999
- 松村一男「太陽神の時代—学説史的考察」、松村一男＋渡辺和子編『太陽神の時代』(下)リトン、2002、327-348
- 松村一男「世界神話における日月神話—ユーリ・ベレツィンの研究を中心に」、篠田知和基編『天空の世界神話』八坂書房、2009a、13-44
- 松村一男「環太平洋地域における太陽の消失と再出現の神話」篠田知和基編『水と火の神話』楽瑯書院、2009b、271-284
- 松村一男『神話学入門』講談社学術文庫、2019a (第3章「マックス・ミュラーと比較神話学の誕生」、58-74)
- 松村一男『はじめてのギリシア神話』ちくまプリマー新書、2019b
- 松村一男「伝播の神話学」、松村『神話思考Ⅲ 世界の構造』言叢社、2021a、55-72
- 松村一男「アマテラスと日本神話」『むろのつ』30 (2021b)、9-13
- 松村一男『女神誕生』講談社学術文庫、2022
- 松村一男・吉田敦彦編著『アジア女神大全』青土社、2011
- 松村一男・森雅子・沖田瑞穂編『世界女神大事典』原書房、2015
- 松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究【上巻】』リトン、2002
- 松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究【下巻】』リトン、2003
- フリードリヒ・マックス・ミュラー (山田仁史訳)「比較神話学」、松村一男＋下田正弘監修『比較神話学の誕生』、国書刊行会、2014
- 溝口睦子『アマテラスの誕生』岩波新書、2009
- 森雅子『西王母の原像—比較神話学試論』慶應義塾大学出版会、2005
- 吉田大輔「ヒッタイトの太陽神」、松村一男・渡辺和子編『太陽神の時代』(下)リトン、2003、63-82
- デイヴィッド・ライク (日向やよい訳)『交雑する人類：古代 DNA が解き明かす新サピエンス史』NHK 出版、2018
- コリン・レンフルー (橋本楨矩訳)『ことばの考古学』青土社、1993 (Collin Renfrew. *Archaeology & Language: The Puzzle of Indo-European Origins*, Jonathan Cape, 1987)
- Absolon, Karel. The Diluvial Anthropomorphic Statuettes and Drawings, especially the so-called Venus Statuettes discovered in Moravia, *Artibus Asiae* 12 (1949), 201-220.
- Alberti, Benjamin. Faience Goddesses and Ivory Bull-leapers: The Aesthetics of Sexual Difference at Late Bronze Age Knossos, *World Archaeology* 33 (2001) 189-205.
- Alexiou, Stylianos. *Minoan Civilization* (second revised edition), Heraclion, 1969.
- Asher-Greve, Julia and Joan Goodnick, Westenholz, *Goddesses in Context: On Divine Powers, Roles, Relationships and Gender in Mesopotamian Textual and Visual Sources*. (Orbis Biblicus et Orientalis 259) Fribourg / Göttingen: Academic Press / Vandenhoeck Ruprecht, 2013.
- Beck, Roger. *Planetary Gods and Planetary Orders in the Mysteries of Mithras*, E. J. Brill, 1988.
- Beckman, Gary. Hittite Religion, Salzman, Michele Renee and Marvin A. Sweeney eds., *The Cambridge History of Religions in the Ancient World: Volume 1 From the Bronze Age to the Hellenistic Age*, Cambridge University Press, 2013, 84-101.
- Beckman, Gary. Females as Sources of Authority in Hittite Government and Religion, in Ilan Peled ed., *Structures of Power: Law and Gender across the Ancient Near East and Beyond*, Oriental Institute of the University of Chicago,

- 2018, 143-151.
- Bintliff, John L. Structuralism and myth in Minoan Studies, *Antiquity* 58 (1984), 33-40.
- Birney, Kathleen Jeanne. *Sea Peoples or Syrian Peddlers? The Late Bronze – Iron I Aegean Presence in Syria and Cilicia*, dissertation at Harvard University, 2007.
- Bonney, Emily Miller. Dismantling the Snake Goddess: A Reconsideration of the Faience Figurines from the Temple Repositories at Knossos, *Journal of Mediterranean Archaeology* 24 (2011) 171-190.
- Burkert, Walter. *Greek Religion*, Harvard University Press, 1985
- Castleden, Rodney. *Minoans: Life in Bronze Age Crete*, Routledge, 1999.
- Chapin, Anne P. Power, Privilege, and Landscape in Minoan Art, *Hesperia Supplement* 33 (2004), 47-64.
- Coldstream, J. N. A Protogeometric Nature Goddess from Knossos, *Bulletin of the Institute of Classical Studies* 31 (1984) 93-104.
- Dexter, Miriam Robbins. *Whence the Goddesses: A Source Book*, Pergamon Press, 1990.
- Dexter, Miriam Robbins and Victor H. Mair. *Sacred Display: Divine and Magical Female Figures of Eurasia*, Cambria Press, 2010.
- Dexter, Miriam Robbins and Victor H. Mair. *Sacred Display: New Findings*, SINO-PLATONIC PAPERS Number 240, 2013.
- Dixon, Alan F. and Barnaby J. Dixon. Venus Figurines of the European Paleolithic Symbols of Fertility or Attractiveness? *Journal of Anthoropology*, 2011, 1-11.
- Duhoux, Yves and Anna Morpurgo Davies. *A Companion to Linear B Mycenaean Greek Texts and their World*, Volume 1, Peeters, 2008.
- Edmunds, Lowell. *Stealing Helen: The Myth of the Abducted Wife in Comparative Perspective*. Princeton University Press, 2016.
- Eller, Cynthia. Two Knights and a Goddess: Sir Arthur Evans, Sir James George Frazer, and the Invention of Minoan Religion, *Journal of Mediterranean Archaeology* 25.1 (2012) 75-98.
- Evans, Arthur J. *The Mycenaean Tree and Pillar Cult and its Mediterranean Relations*, Macmillan, 1901.
- Evans, Arthur J. The Minoan and Mycenaean Element in Hellenic Life, *The Journal of Hellenic Studies*, 32 (1912), 277-297.
- Fauth, Wolfgang. *Helios Megistos: Zur synkretistischen Theologie der Spätantike*, E. J. Brill, 1995.
- Foley, Helene P. ed. *The Homeric Hymn to Demeter*, Princeton University Press, 1994.
- French, Elizabeth. The Development of Mycenaean Terracotta Figurines, *The Annual of the British School at Athens*, Vol. 66 (1971), 101-187.
- Gibson, J. C. L. *Canaanite Myths and Legends* (second edition), T & T Clark, 1978.
- Gimbutas, Marija. *The Language of the Goddess*, Thames & Hudson, 1989.
- Gimbutas, Marija. *The Living Goddesses*, University of California Press, 1999.
- Harlan, Deborah. The Cult of the Dead, Fetishism, and the Genesis of an Idea: Megalithic Monuments and the Tree and Pillar Cult of Arthur J. Evans, *European Journal of Anthropology* 14 (2011), 213-233.
- Hart, George. *The Routledge Dictionary of Gods and Goddesses* (second edition), Routledge, 2005.
- Higgins, Reynold. *Minoan and Mycenaean Art* (revised edition), Thames and Hudson, 1981.
- Hoffner Jr., Harry A. *Hittite Myths* (second edition), Scholars Press, 1998.
- Jacobson, Esther. *The Deer Goddess of Ancient Siberia: A Study in the Ecology of Belief*, E. J. Brill, 1993.
- Jacobson-Tepfer, Esther. *The Hunter, the Stag, and the Mother of Animals: Image, Monuments, and Landscape in Ancient North Asia*, Oxford University Press, 2015.
- Lagana, Louis. Was Malta a Place for the Veneration of a Mother Goddess?, *The Journal of Archaeomythology* 9 (2020), 15-37.
- Lazaridis, Iosif, Songül Alpaslan-Roodenberg et al. The genetic history of the Southern Arc: A bridge between West Asia and Europe, *Science* 377, 939 (2022).
- Lubell, Winifred Milius. *The metamorphosis of Baubo: myths of woman's sexual energy*, Vanderbilt University Press,

1994.

- MacQueen, J. G. Hittian Mythology and Hittite Monarchy, *Anatolian Studies* 9 (1959), 171-188.
- Mallory, J. P. *In Search of the Indo-Europeans: Language, Archaeology and Myth*, Thames & Hudson, 1989.
- Mallory, J. P. and D. Q. Adams. *The Oxford Introduction to Proto-Indo-European and the Proto-Indo-European World*, Oxford University Press, 2006.
- Malone, Caroline and Simon Stoddart. Figurines of Malta, in T. Insoll ed., *The Oxford Handbook of Prehistoric Figurines*, Oxford University Press, 2017, 729-754.
- Marinatos, Nanno. The Indebtedness of Minoan Religion to Egyptian Solar Religion: Was Sir Arthur Evans right?, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 1 (2009), 22-28.
- Marinatos, Nanno. *Minoan Kingship and the Solar Goddess: A New Eastern Koine*, University of Illinois Press, 2010.
- Marler, Joan ed. *From the Realm of the Ancestors: An Anthology in Honor of Marija Gimbutas*, Knowledge, Ideas & Trends, 1997.
- Masson, Emilia. *Les douze dieux d'immortalité: croyances indo-européennes à Yazilikaya*, Les Belles Lettres, 1989.
- Matthiae, Paolo. Pouvoir et prestige : Images égyptiennes pour le panthéon et la royauté paléosyrienne, *Proceedings of the 9th International Congress of the Archaeology of the Ancient Near East*, Basel 2014, vol.1, 213-233.
- Matsumura Kazuo. Theories of Diffusionism: Myth and/or Reality?, *Comparative Mythology* 5 (2019), 44-54.
- McDermott, LeRoy. Self-Representation in Upper Paleolithic Female Figurines, *Current Anthropology* 37 (1996), 227-275.
- Meegan, Eimear. Bodies of Evidence? Re-imagining a Phenomenological Approach to Space and Time in Prehistoric Malta, in Stella Souvatzi and Athena Hadji eds., *Space and Time in Mediterranean Prehistory*, Routledge, 2014, 84-100.
- Momigliano, Nicoletta, R. C. Bosanquet and Piet de Jong. Duncan Mackenzie: A Cautious Canny Highlander & The Palace of Minos at Knossos, *Bulletin of the Institute of Classical Studies. Supplement*, No. 72, 1999.
URL: <https://www.jstor.org/stable/43768001>
- Morris, C.E. From ideologies of motherhood to collecting mother goddesses, in Y. Hamilakis and N. Momigliano, *Archaeology and European Modernity*, *Creta Antica* 7 (2006), 69-78.
- Nilsson, Martin P. *The Minoan-Mycenean Religion and its Survival in Greek Religion*, G. W. K. Gleeup, 1950 (2nd ed.)
- Nowell, April and Melanie L. Chang. Science, the Media, and Interpretation of Upper Paleolithic Figurines, *American Anthropologist* 116 (2014), 562-577.
- Peatfield, Alan A.D. and Christine Morris. Dynamic Spirituality on Minoan Peak Sanctuaries, in Kathryn Rountree, in Christine Morris, and Alan Peatfield eds., *Archaeology of Spiritualities*, Springer 2012, 227-245.
- Reich, David. *Who We are and How We got Here: Ancient DNA and the New Science of the Human Past*, Oxford University Press, 2018.
- Richardson, N. J. *The Homeric Hymn to Demeter*, Clarendon Press, 1974.
- Rigoglioso, Marguerite. *Virgin Mother Goddesses of Antiquity*, Palgrave, 2010.
- Rountree, Kathryn. The Case of the Missing Goddess: Plurality, Power, and Prejudice in Reconstructions of Malta's Neolithic Past, *Journal of Feminist Study of Religion* 19 (2003), 25-43.
- Sakellarakis, J. A. *Herakleion Museum: Illustrated Guide*, Ekdotike Athenon S.A., 1999.
- Sanders, N. K.. *The Sea People: Warriors of the Ancient Mediterranean (revised)*, Thames & Hudson, 1985.
- Sergent, Bernard. *Les Indo-Européens : Histoire, langues, mythes*, Payot, 1995.
- Soffer, O., J. M. Adovasio, and D. C. Hyland. The "Venus" Figurines: Textiles, Basketry, Gender, and Status in the Upper Paleolithic, *World Archaeology* 41 (2000), 511-537.
- Stuckey, Johanna H. The Great Goddesses of the Levant, *The Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 30 (2003), 127-157.
- Talalay, Lauren. The Mother Goddess in Prehistory: Debates and Perspectives, James, Sharon L. & Sheia Dillon eds., *A Companion to Women in the Ancient World*, John Wiley & Sons, 2012, 7-10.
- Tazawa Keiko. Transforming goddesses in Ancient Egypt, in Kawai, Nozomu and Benedict G. Davies eds. *The Star who*

- Appears in Thebes: Studies in Honor of Jiro Kondo*, Abercromby Press, 2022, 491-499.
- Teffeteller, Annette. Greek Athena and the Hittite Sungoddess of Arinna, in Susan Deacy and Alexandra Villing eds. *Athena in the Classical World*, Brill, 2001, 349-365.
- Torri, Giulia. Did the Storm God of Zippalanda have a Mother or a Wife? Remarks about the Cult of Katahḫa and the Sun Goddess of the Earth in Zippalanda and Ankuwa, *Asia Anteriore Antica* 1 (2019), 217-224.
- Tringham, Ruth & Margaret Conkey. Rethinking Figurines: A Critical View from Archaeology of Gimbutas, the 'Goddess' and Popular Culture, Lucy Goodison & Christine Morris eds. *Ancient Goddesses: The Myths and the Evidence*. The University of Wisconsin Press, 1998, 22-45.
- Trump, David H. *Malta: Prehistory and Temples*, Midsea Books, 2002.
- Ulasey, David. *The Origins of the Mithraic Mysteries*, Oxford University Press, 1989.
- Woudhuizen, Fred C. Towards a Reconstruction of Tin-trade Routes in Mediterranean Protohistory, *Praehistorische Zeitschrift* 92 (2017), 342-353.
- Wright, Rita P. ed. *Gender and Archaeology*, University of Pennsylvania Press, 1996.